
《研究ノート》

教育方法の視点からみた学校と地域社会の関係

— デューイの教育論を手がかりとして —

菱 山 覚一郎

キーワード

経験主義	デューイ	コミュニティ	コミュニケーション
(empiricism	John Dewey	community	communication)

はじめに

近年、我が国の学校教育においては、教育の国際化や情報化と同時に、地域の教育力にも注目が集まっている。具体的には問題解決的な社会科や総合学習の実践のみならず、地域人材の活用や地域運営学校の試みなどが進められ、学校と地域社会の関係が問われている。史的に振り返っても、経験主義教育理論に影響を受けた地域教育計画や、地域に根ざす教育が指向され、試行錯誤的に様々な理論と実践が展開された。これらの動向の背後には、ジョン・デューイ (John Dewey 1859-1952) の教育論があると言われる。

そこで本稿では、現代的な観点から学校と地域社会の関係をデューイの「コミュニティ (community)」概念から探ってみる。彼の「コミュニティ」に関しては、数々の先行研究⁽¹⁾が残されている。本稿では、それらの成果に学び、教育方法の視点を意識しながら「コミュニティ」概念の把握や、教育的活用法などを分析する。その過程においては、現代の学校教育のあり方や、地域との連携施策にも示唆が得られると考える。

第1章 教育実践と「コミュニティ」

デューイの教育論は、学校の社会化と児童中心の原理に特色があり、学校を萌芽的な社会とし、そこでの活動を重視した経験主義教育である。彼に従えば、学校は「子供がコミュニティの一員として参加し、貢献するための機関」⁽²⁾と説明される。なぜなら「学校は、子供に人類の継承してきた資源を共有させ、子供自身の力を社会目的のために使用するのに最も適した作用がすべて集中している形式のコミュニティ」⁽³⁾だからである。つまり学校は、社会生活を実践する小規模な「コミュニティ」そのものに他ならない。以前より彼は、個人が役割を遂行することによって形成された「コミュニティ」を、文化を

共有する社会生活のまとまりとして意識している。十九世紀末からの都市化や工業化という社会情勢による「コミュニティ」の崩壊への危機感から、このような位置付けを試みた。

デューイは、教育を蘇生させるために「コミュニティ」に、社会一般で行われている仕事（work）などの活動（activity）を学校に取り入れた。仕事は、「子供が生活しているコミュニティからほとんど導き出され」、「子供に対して教育的価値を持っている」⁽⁴⁾のである。体験などの活動から仕事を学べば、働く人々が役割を担っていることへの理解や、自身の立場や役割も認識できる。その過程において、子供は「コミュニティの生活を通して、仕事において刺激され、統制され」⁽⁵⁾、義務と責任の把握も可能になると考えた。同時に、活動による学びは、次の世代への伝達という意図も含まれるため、「コミュニティ」の維持や更新にも寄与することになる。

教師の役割についてデューイは、伝統的な教える教育観を否定した上で、「子供の福祉とコミュニティの両者のために、子供と環境の間の結びつきをできるだけ完全で、知的にすること」⁽⁶⁾と述べる。彼の求める教師は、「コミュニティ」の現実や課題を把握し、それを自らの課題として受け止め、子供に「コミュニティ」の一員としての態度と能力の育成を任務とする。別の言葉で表現すれば、教師は「コミュニティに対する奉仕者」⁽⁷⁾となる。そして学校は、「コミュニティの精神と関心を発展させるもの」⁽⁸⁾と言える。彼は、学校を「コミュニティ」の中心に置き、社会変革や課題解決の中心的な役割を持たせようとした。ここでは学校の絶えざる進歩や前進と、「コミュニティ」の発展が同一となっている。

第2章 「コミュニティ」の成立条件

教育こそが、社会を維持し、変革しながら継続させる手段と考えるデューイの教育論にとって大切なのが、言葉（language）とコミュニケーション（communication）である。両者の関係について、彼は「言葉は、第一義的には、思想の表現ではなく、社会的なコミュニケーションの手段」⁽⁹⁾と捉える。そして発達過程にある子供にとって言葉は、「社会的道具であり、コミュニケーションの手段であり、それを通して、ある人が他人の思想や感情を共有するための道具」⁽¹⁰⁾と認識する。その際、言葉は、単に知識を得る方法や教え込む手段として扱われるのでない。そのような場合は、社会的な伝達としての価値を失い、個人および「コミュニティ」の発達に寄与しない。言葉は、「コミュニティ」という共通の土台において、自分や他人の経験を他者に与え、他者の経験を受け取るための手段なのである。

この言葉によるコミュニケーションに意義を見いだすデューイの考え方は、「コミュニティ」概念に独特の意味をもたらす。彼は、「コミュニティ」には「共通の目的を認識し、それに興味を持ち、それを考慮しながら自分の生活を統制する」⁽¹¹⁾という条件を求める。「コミュニティ」を形作るには、人々が共通の目的に向かっているだけではなく、協力や関心、そしてコミュニケーションも持ち合わせる必要があるという。共通の目的を持ち、成員同士が目的を認めて生活し合う集団が「コミュニティ」に他ならない。彼に従えば、学校や学級などの場合、年齢や目的で集められた集団は「コミュニティ」ではない。成員が共通の目的を理解し、それに向かい生活を統制すると同時に、成員同士にコミュニケー

ションが成立しなければならない。ここに関与する教師は、「コミュニティ」の現実や課題を学校に取り入れるだけでなく、子供の集団を「コミュニティ」とする責任も有していることとなる。

学校の中に「コミュニティ」を成立させるためには、先に触れたように仕事（work）などの活動（activity）が必要となる。デューイにとって、活動は「自身の活動に対して、他人が示す反応を通して、それが社会的関係においてどのような意味を持つのかを知る」⁽¹²⁾ 行為であり、「社会科学的に子供を人間の世界に導き、個人的な面では多種の関係要因として自分を表現する」⁽¹³⁾ ののである。学校での活動は、「コミュニティ」を知り、社会化に欠かせない要素であり、自己表現活動にも他ならない。彼は、学校において「子供の活動を正規の作業（occupation）として導入」⁽¹⁴⁾ することにより、学校と社会の連携を意識した。そこでの活動は、自分自身の衝動の形や行為という意味ではなく、社会性を持つと同時に社会を学び、成長と連続の要因を持っている。ひとつの活動が次の活動に結びつき、個人と同時に「コミュニティ」も成長させる。

第3章 「コミュニティ」の広がり

デューイの教育論における「コミュニティ」は、「地域的で面識的な交際のあるコミュニティ」⁽¹⁵⁾ である。日常生活を営む場であり、直接的なコミュニケーションが成立し、経験の共有が可能な範囲と言える。しかし、都市化と産業化の波が押し寄せたため、生活基盤の範囲が拡大すると同時に複雑化を招き、成員同士の共同的な活動や目的意識の共有が難しくなった。そのような状況の中、彼は「コミュニケーションを通して、一つのコミュニティの成員であるという有効な感覚、理念や願い…（中略）…貢献する成員という意識を発展させる」⁽¹⁶⁾ 必要を説く。ここで表現されるコミュニケーションは、人々が経験を共有する方法に他ならない。もちろん、そこで求められるのが、有益な学習が効果的に行われる場としての学校である。群衆や大衆を「コミュニティ」に対して責任を持つ公衆（public）にするには、コミュニケーションを通して、「（成員が）コミュニティを特徴づけている伝統や見解および関心事を把握」⁽¹⁷⁾ しなければならない。それらの絶えざる連続と繰り返しによって、「コミュニティ」はどのような場面でも存続していく。「コミュニケーションの機能が加わり、その中で共同の事業が行われると同時に感情と観念が共有される」⁽¹⁸⁾ ため、規模の大小を問わず「コミュニティ」は成立する。

規模の拡大や複雑化する「コミュニティ」に対応して、教師の役割なども変化する。教師についてデューイは、「知識に責任を持ち、また社会組織に役立つ諸活動に関連する教材の知識に責任」⁽¹⁹⁾ 持たなければならないと説く。もちろん教育の営みは、コミュニケーションを基礎としているため、教師には、経験を共有し、意味を増加させ、発展や発達を見通した諸活動と教材の関係把握が求められる。そのため、教師は「コミュニティとしての集団の生活そのものである相互作用と相互のコミュニケーションの行為に責任を持つ」⁽²⁰⁾ のである。そのような教師により、公衆が育成され、「コミュニティ」はどのような場でも確立すると考えた。

おわりに

デューイの教育論は、単に学校の社会化をめざし、学校と「コミュニティ」を結びつけようとしただけではない。彼の表現する「コミュニティ」には、活動やコミュニケーションが伴い、継続や発展の意識が求められる。そこでの教師の役割は、子供に経験を通して、成員としての役割と責任を伝える点にある。この営みでは、彼の言う経験の再構成が、子供自身や教師自身、そして「コミュニティ」自身で繰り返されることになる。いかにその繰り返しを展開させるかが、学校教育および教育方法の課題となるだろう。

現在、我が国の学校では地域との連携・協力が模索されている。様々なあり方論や実践が試みられているが、過去の遺産が十分に学んでいるか疑問が残る。本稿では、デューイの「コミュニティ」の意味の一部を扱ったに過ぎないが、このわずかな探究からも学校との連携・教師論・指導法などに多種の示唆を与えてくれる。もちろん、盲目的に受け入れるだけでなく、現代の状況に適合するように再構成しながら、学び続ける必要があると言える。

【注】

- (1) 同概念を扱った研究としては、単行本では、牧野宇一郎『デューイ教育観の研究』（風間書房 1977）・森田尚人『デューイ教育思想の形成』（新曜社 1986）・杉浦宏編『日本の戦後教育とデューイ』（世界思想社 1998）・杉浦宏編『現代デューイ思想の再評価』（世界思想社 2003）・Feodor F. Cruz “John Dewey’s Theory of Community”. 1978. Peter Lang などがある。日本デューイ学会の『紀要』でも、西田文夫・鈴木政勝・石田貴子・立山善康・高井薫などの研究がある。
- (2) John Dewey “Plan of Organization of the University Primary School”. 1895 (“The Early Works of John Dewey”, Vol.5. The Southern Illinois University Press.1972) p.224
- (3) John Dewey “My Pedagogic Creed”. 1897 (“The Early Works of John Dewey”, Vol.5. The Southern Illinois University Press.1972) pp.86-87
- (4) John Dewey “School of To-Morrow”. 1915 (“The Middle Works of John Dewey”, Vol.8. The Southern Illinois University Press.1985) p.237.p.240
- (5) John Dewey “My Pedagogic Creed”. p.88
- (6) John Dewey “School of To-Morrow”. p.389
- (7) John Dewey “Professional Organization of Teachers”.1916 (“The Middle Works of John Dewey”, Vol.10. The Southern Illinois University Press.1985) p.170
- (8) John Dewey “School of To-Morrow”. p.320
- (9) John Dewey “The University School”. 1896 (“The Early Works of John Dewey”, Vol.5. The Southern Illinois University Press.1972) p.439
- (10) John Dewey “My Pedagogic Creed”. p.90
- (11) John Dewey “Democracy and Education”. 1916 (“The Middle Works of John Dewey”, Vol.9. The Southern Illinois University Press.1985) p.9
- (12) John Dewey “My Pedagogic Creed”. p.84
- (13) John Dewey “The University School”. p.439
- (14) John Dewey “A Pedagogical Experiment”. 1896 (“The Early Works of John Dewey”, Vol.5. The Southern Illinois University Press.1972) p.245
- (15) John Dewey “The Public and Its Problems”. 1927 (“The Later Works of John Dewey”, Vol.2. The Southern Illinois University Press.1984) p.316
- (16) Ibid.p.332
- (17) Ibid.p.334

- (18) John Dewey "Freedom and Culture". 1939 ("The Later Works of John Dewey", Vol.13. The Southern Illinois University Press.1988) p.176
- (19) John Dewey "Experience and Education". 1938 ("The Later Works of John Dewey", Vol.13. The Southern Illinois University Press.1988) pp.34-35
- (20) Ibid.pp.36-37